

『女性活躍「不可能」社会ニッポン』 渋谷龍一、旬報社、2016年

原点としての丸子警報機事件

本書は、すでに日本において社会問題化している非正規労働者問題の本質を正しく見る目をもつ「上級者」を増やすことを目的に書かれた。タイトルや装丁、書きぶりから一見ジャーナリスティックな軽い印象を与えるかもしれないが、内容はあくまで硬派で、論理的かつ心に訴えかける力がある。具体的には、労働法や女性学の教科書に必ず登場し、日本の非正規労働者問題の原点とも言える「丸子警報機事件」が主として扱われる。これは、長野県にある自動車部品のクラクションなどを製造する会社に勤める主婦パートたちが賃金差別に対して起こした有名な裁判である（1993年提訴、1996年判決、1999年和解・全面勝利）。パートタイム労働法の施行（1993年）と同時代の象徴的裁判ともいえる。評者自身も天理大学の女性論の授業で女性の労働問題を取り上げるときにはこの事件（裁判）について、主婦パートの基幹労働力化問題や、正規と非正規との均等待遇8割判断（丸警ルール）などを交えながら解説するのだが、事件の当事者たちの裁判に至るまでの過程とリアルな思いを、今ひとつ上手く伝えられず内心忸怩たる思いをずっと抱いてきたものである。それが渋谷氏の丹念な当事者への取材により、本書にてその生き生きとした再現描写が初めて可能となったことは大変意義深い（第5章）。

主婦パートの構造と実像

特徴的なのは、この事件にいきなり入るのではなく、本書にはよく練られた「トレッキングコース」が用意されている点である。第1章から第4章までは、世間一般の誤った主婦パート観を少しずつ揉みほぐし、正しい理解へと導いていく準備体操的な役割をもつ。ここは是非、初心者も中・上級者も丁寧に読み進めたいところである。

第1章「主婦パートを知らずして「非正規労働問題」は語れない」では、非正規労働者の最大多数派（804万人）の主婦パートに照準が絞られる。日本ではすでに非正規そのものが労働者の4割を占め、さらにその非正規の4割が主婦パートという「ダブル4割」時代に突入しているが、この最大多数派集団は「主婦」「既婚女性」ということで、一見すると緊急性が高いとされる派遣やフリーターなどより軽く見られる傾向にある。夫に養われ税金や社会保険料がかからない範囲でお気楽に働くという、主婦パートへの誤ったイメージこそが根の深い甚大な問題なのだが、こういった誤解はずっと放置され続けてきたという。渋谷氏は「はじめに」において、国民が非正規労働問題をきちんと「理解していない」ことを政府がしっかり「理解している」のではないかと、とまで訝っているのである。

続く第2章「主婦パートのメカニズム～非正規労働の原型～」では、主婦パートがあたかも建築物のような3つのセットによって巧妙に作り込まれた構造であることが鮮やかに示される。第1のセットは(A)パートの基幹労働力化(基幹化)と(B)正社員とパートとの賃金格差という組み合わせ、第2のセットは、(C)男性正社員向け主収入用賃金と(D)主婦パート向け副収入用賃金という組み合わせである。そしてこれらを支える第3のセットとして(E)男女の役割分業意識と(F)税制度、

社会保険制度(第3号被保険者制度)がある。正社員経験者が9割を占める主婦パートは、未熟練労働者とは言えず、彼女たちを低賃金のまま基幹化することは企業にとって「うまみ」となるという。これが「同一価値労働同一賃金原則」違反であることは明らかであるが、企業は第3のセットを堅持することでこれらの辻褄合わせをしようと躍起になる。家族的責任

に現状として規定されながら、基幹化の要請にも低賃金で対応する主婦パートは、日本社会から促される女性像の典型だが、企業でも家庭でも何事もなかったかのように扱われる「見えない」存在となっている。だが主婦パートの「うまみ」を学習した企業は、このしくみをさらに他の非正規労働者にも応用し深刻な問題を引き起こしているという(学生のブラックバイトや、シングルマザーのパートなど)。その意味で主婦パートは非正規労働問題の原型だと、渋谷氏は本書において何度も強調している。

原型であるはずの主婦パートがなぜ「見えない」のか。第3章「主婦パートの発見～虚像と実像～」では、各種アンケートに見られる主婦パートの虚像から離れ、実像に迫っていく。まず、主婦パートが苦境に陥っても無力である(闘えない)ことを手掛かりに、なぜ闘わないのかが明らかにされる。闘えないから実像が覆い隠され、虚像が蔓延するわけだが、しかしごく少数の闘う主婦パートの事例から、その実像が浮かび上がる。その好例が第4章「たたかう主婦パートのリアル～坂喜代子さんの場合～」だ。銀行支店での過酷な業務からくる労災のパート初の認定、女性ユニオン、基幹化の実態、主婦パートの「トリセツ」(取扱説明書)、改正パートタイム労働法における正社員化のための「3要件」をめぐる攻防などを通して、読者にはここでたっぷりと「感情移入」し、わがこととして問題の本質を味わうことが求められている。

以上の周到な準備を経て、いよいよクライマックスの第5章「たたかう主婦パートのリアル～丸子警報機原告団の場合～」にて、原点としての丸子警報機事件が扱われる。丸子警報機で正社員と同じ仕事をしながらも「特殊従業員」と呼ばれた主婦パートたち。彼女たちが裁判を通して問題提起したのは究極的には、日本全体に刷り込まれた性別役割分業意識とそれを支える諸制度を次世代に引き継がず根絶することにあつたのだと、渋谷氏は読み取る。主婦パートの悪しき構造にメスを入れずして真の意味での「女性活躍」は不可能であろう。本書からは、企業のみならず主婦パートに依存してきた「家族」のあり方についても再検討が促されているように思える。

